

---

# 星詠みと流星

黒崎メグ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星詠みと流星

### 【Nコード】

N7898S

### 【作者名】

黒崎メグ

### 【あらすじ】

星詠みは命を削って星を詠む。

皇帝の権力の下保護された地シユーレで暮らす星詠みの少女セラは、皇帝の命に従い命を削る日々疑問を覚えながら暮らしていた。そんなある日、セラは流星メテオだという少年に出会う。

その出会いがセラを、東の大国ガレと西の大国ドレナの渦中へ巻き込んでいく。

セラがその音に気付いたのは本当に偶然だった。北の地のひどく乾いて鋭い風の音に乗って、どこかで聞いたような鈴の音が聞こえる。セラが今いるのは里の中央に位置する広場の西側だから、どうやら音は里を南北に走る通りの南側から聞こえてくるようだ。風除けとして、ぼろ布を張った棒が立てられた店の軒下から兄と共に顔を出せば、死者を見送るための葬列が進んでいくところだった。彼らが向かう先は北の樹海の中に作られた墓地だ。現に、それは白と黒の不思議な列をなし、村の中央を南北に走る大通りを、北に向けて歩いていく。

黒は、黒い麻布のマントを身に纏った棺の担ぎ手で、白い前開きの羽織に袖を通し、濃紺の帯を締めてそれを先導するのは死者の縁者と村長だ。

黒を纏い木製の棺を四人がかりで担ぎあげているのは帝国兵だろう。

セラはその銀色の瞳で葬列を追いながら、そう結論付けた。黒いマントの下からする鎧と剣がぶつかり合う金属音は隠しきることはできないし、何より里の者なら葬列には必ず膝丈はある白い羽織を纏う。セラが聞いたのはその羽織の裾袖に縫いつけられた鈴の音だったのだろう。

セラは三年ほど前に両親の葬列に参加したことがあるから覚えている。あの頃は、村人しか葬儀に参加していなかったから、まるで夜空の天の川のように綺麗な白の流れができていた。しかし、ここ数力月は、その白い流れを汚すように、黒衣の男達が葬列の中に入り込んでいた。悲しみを慰めるようになる澄んだ鈴の音は、剣と

鏡がぶつかる無粋な音に邪魔されて、死者にもその縁者にも真の意味で響くことはない。

セラはそれを残念に思うと同時に、口にはしない怒りさえ覚えていた。

それほどまでに、ここ数カ月で目にした葬列の数は多い。セラの気持ちを代弁するように、同じく葬列を見送っていた兄は、

「今月に入って、二人目だな。いったい誰が亡くなったんだ？」

と、言った。後ろで、籠に荷物を詰めていた店の主人がその声に反応して、半ば独り言のように呟く。

「ありや、ロウの葬列だ。可哀そうにまだ二十歳にもなっていないつてえのに。優秀な星詠みでさえなけりやあ、もうちよつと長生きできたのによお」

そういう主人もまた、先日長年連れ添った妻を亡くしたばかりであった。だが、悲しいことに、家族の死は、ガレの北の端に位置するシユーレの人々にとっては酷く身近なものである。それでも、家族の死が悲しいことに変わりはないし、それを受け止めるには時間がある。セラとて三年前に亡くなった両親のことを思うと今でも涙が出るし、両親の死と共に心に開いた穴は今も塞ぎ切れずにいる。だが、セラには不思議でならないことが一つだけあった。シユーレの人々がこのようなことになる原因を作った人物を恨むそぶりを見せないことだ。

その証拠に、

「ロウって、歳は兄さんと五歳も離れていないよ。この間まで、一緒に外の世界を見てみたいねって話していたばかりだったのに……」

と、セラが恨めしそうに眩きを漏らせば、セラと同じ銀色の瞳を細めて、兄は、

「でも、ロウは皇帝陛下のために死んだんだ」

と言う。けれどセラは、やはりその言葉に納得できない。否定の意を込めて、先程より強く首を横に振れば、寒さ対策に羽織った鹿革のマントのフードが落ちて、シユールレの民特有の月明かり色の髪が乱れた。

「私たちを助けてくれていていうならなぜ、皇帝はあんなに沢山の命令を出すの。私たちが、魂の一部を飛ばして星を詠んでいるのは知っているはずなのに」

「皇帝陛下は俺達の村を守ってくれているし、北の実りの少ない地で暮らす俺たちに食料も与えてくれていたろう。陛下にお世話になっているんだから、その恩を返すのは当たり前だ」

「守る？ でも、こんな自由を奪って檻に閉じ込めているも同然だよ」

シユールレの一族は、代々、魂の一部を飛ばし星を詠む術を持っている。星は未来の可能性を教えてくれるのだ。その力を知った時の権力者はシユールレの星詠み達を保護するかわりに、自分の一族のみ仕えることを約束させた。だからこそ、それと同時に、シユールレの人々は皇帝の許可なしにシユールレの外に出ることはできない。そしてやって自身の元を集めた星詠み達の力を利用して、彼は大陸中に名を轟かせるほどの大国を築きあげた。その権力者が現在のガレ皇帝の曾祖父である。その頃より、シユールレの一族はガレの皇家に仕え、その恩恵として実り薄い北の地での生活を保障されている。

だが、星詠みとて無限に星が詠めるわけではない。星詠みは、魂の一部を飛ばす分、非常に短命であった。命は、星を詠む回数に比例

して縮んでいく。

それを皇帝も知っているはずなのに、ここ数カ月、皇帝から下される命令は減るところからどんどん増えている。外の世界で何が起ころうとしているのかセラは知らないが、現状を考えると、あまりよくないことが起ころうとしているのは確かだった。いや、起ころうとしているというのは適切ではなく、起きていると表現した方が正しいのかもしれない。かもしれない。というのは、星詠みは確かに未来の可能性を詠むことができるが、星が伝える情報は断片的でそれを正しく解読することは難しいためだ。昔ならいざ知らず、外界と断絶された生活を送る星詠み達にはそれを解読するには情報が少なすぎた。従って、星詠みは星から伝わった情報をそのまま兵に伝えるだけで、今帝国で何が起ころうとしているのか、もしくは起こっているのか知る者は、シューレの中では村長むらびとを除けば全くといっていいほどいない。

兄の考えを否定するわけではないが、だからこそセラには、皇帝が事情も話さずにシューレの人々の日々の生活を人質にとって、無理難題を押し付けているようにしか思えなかった。

二人の両親もまた、兄妹の生活を守るために命を落とした被害者であつたからだ。

「納得できないならできないで仕方がない。でも、これから先もシューレで暮らしていく以上、受け入れなくちゃならないこと沢山あるんだよ」

優しく諭すような兄の言葉にやはりセラは納得できない。セラは、ふつふつと怒りが込み上げてくるのを感じた。

「兄さんは、父さん達のこと忘れちゃったの？ 本当にそれでいいの？」

その思いを言葉にすれば、やはりセラが望んだのとは違う答えが返ってくる。

「忘れたわけじゃない。だけど、受け入れることにしたんだ」

「そんなのおかしいよ……」

両親が死んだ時の思いを忘れていなければ、受け入れるなんて言葉簡単に出てくるはずがない。それとも、シュールレの人は皆、兄と同じように思いを隠し受け入れることで生きているのか。それは、酷く悲しいことのようにセラには思えた。

「おかしくても構わない。だけど、セラもいつかわかる時が来るよ」

わかりたくもない　それが、セラの素直な気持ちだった。

【2】

そんなセラの髪を兄はくしゃりと撫でる。そうされるとセラは、もう言葉を口にできなくなった。すべてを否定してしまうには、この環境を受け入れてきた期間が長過ぎる。セラは村の大人達がこの環境のすべてを「仕方がない」の一言で済ませている姿しか見たことがない。だから皆が兄と同じなのではなく、兄が皆と同じになるうと努めているのだ。そうしなければ兄はきつと、死という恐怖に押しつぶされていただろう。兄が本当は臆病で、死を誰よりも恐れていることをセラは知っている。

「セラ？」

押し黙ってしまったことを訝しがって、兄はセラの名を呼んだ。そこでセラは思考を止めた。先程まで胸の内を燻ぶっていた怒りは形なりをひそめ、代わりに姿を現したのは恐怖だった。十八歳である兄はもうすでに星詠みの仕事を初めてもよい年頃だ。この先星詠みの命令が下れば、兄はそれを受け入れ続けるだろう。そして迎える先にあるのはおそらく死だ。

兄まで居なくなってしまうっては、セラは一人ぼっちになってしま  
う。

「……兄さん」

「なんだい、セラ」

「わたし、死ぬなら兄さんより先がいい」

セラの言葉に兄の表情が変わる。大きく目を見開いた後、兄の瞳に浮かんだのは悲しみだった。



「そんなこと言わないでくれよ」

兄の声は僅かに掠れている。セラはそつと目を閉じた後、父の顔、母の顔を順に思い浮かべ、そして最後に兄の顔を真正面から見詰めた。

「それでもわたしは、これ以上家族が死ぬところを見たくないの…」

セラの呟きは、葬列の鈴の音に混じって消えていく。兄はその言葉拾うことなく、無言で再びセラの頭を撫でると、セラに背を向けた。セラには兄の思いがわからなかった。それでもセラは、背を向けたまま後ろ手に差し出された兄の手を取った。

「帰ろう」

手を通して伝わってくる体温がセラを少しだけ安心させた。

家に帰りついた後、セラは受け取った配給で夕食の準備を始めた。シューレの村の家々は石と土で作られた簡素なものである。積み上げた石で壁をつくり、寒さを防ぐためにその上から土を塗り耐熱性を得ていた。さらには暖炉の熱が部屋に行き渡りやすいように部屋の間には壁がなく、寝室と台所を区切るのは、動物の毛を編んで作られた垂れ幕だけだ。

兄は早々に垂れ幕の向こうに姿を消したきり、セラの前に姿を現さない。セラはスープをかき混ぜる手を止め、垂れ幕へ視線をやった。垂れ幕の向こうからは衣が擦れる音がする。兄は何をしているのだろうか。

そう疑問に思い寝室へ足を向けかけたその時、木製のドアを叩く乾いた音が家の中に響いた。

「はい、今、開けます」

セラは門かどずらし、ドアを開けた。

そこに立っていたのは黒いマントに身を包んだ帝国兵だった。その身体は大柄でセラは恐る恐るその顔を見上げた。

「あの何のご用でしょうか？」

不安げにセラが呟くと、

「わたしはただの付き添いだ」

と彼はその身をずらした。すると彼の背後から、一人の小柄な老人が姿を現した。セラは彼女が誰であるかいたいほど知っていた。押し曲った背中に、木製の杖　シューレの民の月明かり色の髪は白髪交じりで、より淡い光を放っている。先程通りで目にした時のまま彼女は白い羽織を身につけている。

「村長……」

セラの呟きに彼女は木製の杖をとんとんと打ち鳴らすことで肯定を示した。袖に付けられた鈴の音が室内に響く。その音を聞いてセラは嫌な予感がした。何より、先程通りで兄が自分に背を向けた行為

がその不安を駆り立てた。

そんなセラの背後で、垂れ幕が擦れる気配がする。同時に兄の声が響いた。

「村長むらおみ！」

「迎えに参ったぞ」

村長の視線はセラを通り越して、寢室から姿を現した兄へと向いていた。

【3】

「兄さん……」

セラは兄の姿を見て息をのんだ。

兄が身につけているのは、一族の正装であつたからだ。夜に馴染むように染め上げられた紺の上着を、柔らかな絹の帯で巻いている。上着はこの地方でのみ自生している植物の葉の煮汁で染め上げられたもので、星と心を通わせる儀式において、夜に馴染むその色は欠かせないものである。また腰に巻かれた帯は、月明かりを浴びて育てた蚕から紡ぎだされた糸から大切な儀式のためだけに織りあげられたものだった。

先程から衣の擦れる音は兄が身支度を整えていたからだつたのだ。迎えに来たという言葉と兄の出で立ちから、セラは瞬時に状況を理解した。

「兄さんに星を詠ませるおつもりですか！」

「何をそんなに声を荒げる必要がある？ もう随分前に通達はなされていたはずじゃ」

村長の言葉にセラは振り返る。黙ってその遣り取りを見守っていた兄は目が合うと、さっと顔を反らしてしまった。

セラは悟った。兄は隠していたのだ。昼間自分に背を向けた行為もすべてを誤魔化す行為でしかない。

どうして自分に何も言ってくれなかったのだろうか。

それを悲しく思うと共に、セラの中で昼間抑え込んだ怒りが再び頭をもたげようとしていた。間の悪いことにその怒りをぶつけるのに値する人物達がセラの前にいる。それでもセラには人様の前で感情に流されるまま怒りを表に出さないだけの分別があつた。セラは

怒りを押し殺すように、下を向いて唇を噛んだ。

村長、帝国兵、兄、どの顔を目の前にしても怒りを抑えきれぬ自信がなかった。だから顔を合わせないことで感情の波が去るのを待とうとした。

しかしその努力も水の泡と消えてしまう。

その切欠を作ったのは村長に同行してきた兵の一言だった。

「煩わしい揉め事は勘弁してくれないか。わたしもお前達星詠みの世迷い言にいつまでも付き合っている時間は惜しいのだ」

かっ頭血が上り、その衝動のままセラは手を振り上げる。

「やめろ！ セラ！」

その手が兵の頬を打つ前に、兄がセラを抑えつけた。

「離してよー！」

「セラ、落ち着くんだ」

後ろから抱え込むようにして抑えつけた兄の腕の中から抜け出すと、セラはもがく。

「無理よ！ だってこいつは私達の命に関わることを世迷い言と言ったのよ。わたし達がどんな思いで星を詠んでいるかも知らないくせに」

セラのその言葉を聞いて、

「ほう、そちらこそ誰がお前達の暮らしを守っていると思ってるんだ？」

と兵は言う。

「わたしはあんた達に守って欲しいなんて一言も頼んでない。あんた達が来てから村はすっかり変わってしまったんだ！」

ほんの半年前　彼らが村に居座るようになった以前は、時々やってくる帝都からの使者の来訪に応じて細々と星を詠む生活だったはずだ。それでも死者は出ていたが今と比べると少なく、村人たちは必ず死者に対して敬意を払っていた。それが今はどうだ。死者が増えるに従って、村人達の意識は変化している。彼らが死者に向けるのは敬意というよりも諦めを含んだ同情と死んだのが自分の身内ではなかったことへの安堵だ。

その変化をもたらした切欠は目の前にいる兵達に他ならない。

「世間知らずの小娘が、命の危機に晒されているのが自分達だけだと思わないことだ」

「それってどういう……」

意味　と続けられるはずだった言葉は村長に阻まれた。とんつと杖を打ち鳴らした村長は険しい顔つきで兵を睨んでいる。

「それを告げてはならぬ」

その視線に気付いて兵は肩を竦める。

「おっと、この村では外の話は禁句だったな。まあいいさ、無知ほど幸せなことはない。あんたもそう思うだろ、村長殿」

村長は無言で兵を一瞥しただけだった。だが村長の瞳の中で感情

の波に揺れたのをセラは見逃さなかった。

「村長？」

セラが不安げに呼べば、彼女は瞬時にその感情を消し去ってしまった。彼女は威厳を取り戻して、口を開く。

「時間が推している。すぐに参るぞ」

彼女の言葉に、セラを拘束していた兄の手が離れる。その手が離れる瞬間セラは「ごめん」という兄の声を聞いた。背を向けた村長の後に続いた兄の背にセラは追いつがろうとしたが、行く手を阻んだ兵の手が伸びてきた瞬間、セラの意識は遠退いていった。

【3】（後書き）

「意見、感想はお気軽にどうぞ。」



そしてセラが冷たい土間の上で目を覚ましたのは、辺りがすっかり暗くなつてからのことだった。村長の姿も、忌々しい兵の姿も、何より兄の姿も、もうどこにもない。

頭に鈍い痛みを感じるから、どうやら自分はこの兵に昏倒させられたらしい。あれからどのくらい経つたというのだろうか。

かまどにくべられた火は、燃料の木材を灰に変え、既に消えてしまっている。

開け放されたままの木製のドアは、風を受けてキーキーと音をたてていた。

セラはそのドアを視界に捉え、ついつと視線を上へ向けた。

太陽はその姿を潜め、空に姿を晒しているのは月と星々であった。星々の位置と月の高さからいつて、あれから一刻以上は過ぎている。それを裏付けるように、セラの手足は冷えきつていていうことを聞きそうにない。もう少し目が覚めるのが遅ければ、取り返しのないことになっていたかもしれない。そう考えてセラは身震いをした。北の地に生きるセラは、十分に寒さの恐ろしさを理解している。しかし今はそれ以上に、兄の行方を考えることの方が恐ろしい。

寒さに重たくなった身体をゆっくりと起こし、セラは胸の前で手を組んだ。

「お願い、星よ。兄さんを連れていかないで」

それは声というには小さすぎる音だった。それでも胸の奥から喉を通つて、込み上げてきた熱がその音を形作つたのである。その熱がセラの身体から外に出る瞬間、セラは目の前に火花が散つたかのような感覚に襲われた。

キラリッと一瞬、何かが光り、セラは思わず目を瞑ってしまった

のだ。

「じゃあ、乙女、君が代わりに俺と共にくるかい？」

降ってきたのは、兄のそれとは違い、荘厳な鐘の音を思わせる男の声だった。驚いてセラが目を開けると、月明かりを纏った少年とも、青年ともつかない年頃の男の姿がある。

よく見れば彼が月明かりを纏っているように見えるのは、シューレの民が儀式に使う帯と同じ素材でできているからであった。髪は夜の闇を溶かしたような艶やかな黒髪で、その黒髪に縁取りされた輪郭の中、真っ直ぐとセラを捉えていたのは金色の双眸である。

セラはその双眸に息をのみ、掠れる声で尋ねた。

「あなたは誰？」

その問いに彼の者は笑う。

「俺に呼びかけた君が、それを聞く？」

質問に問い掛けて返されたが、セラはその言葉に彼の正体を悟った。彼は星なのだ。そう考えてみれば、彼の双眸は空で寄り添う双子星のようである。

だがどうしてこんなに近くに星がいるのか、セラにはわからなかった。

「私はあなたの元まで来てしまったの？」

「違うよ。俺は流星メテオ 強い思いに呼ばれた流れ星さ」

「流星メテオ……」

セラはその言葉を反芻して、目を見開いた。

先程セラが目にした光は、きっと彼が落ちて来たからなのだろう。  
流星<sup>メテオ</sup> 地に落ちた星、失われた輝き。それはシューレの民にと  
つて禍事<sup>まがごと</sup>の象徴として語り継がれている。目の前に立つ彼は災厄を  
運んできたのだろうか。

だが確かに彼は、セラの呼びかけを聞いたと言った。彼がその呼  
びかけに応じてやってきたというなら、セラにとっては災いではな  
い。むしろ兄を助けてくれる唯一の救いといってもよい。

「お願い、兄さんに星を詠ませないで」

セラは重たい身体を引き摺り、ドアの外に立つ流星<sup>メテオ</sup>に縋りつく。  
流星<sup>メテオ</sup>は膝を折り、セラと視線を合わせると、そっとその手を取った。

「それが君の願い？」

セラは無言で頷く。それに流星<sup>メテオ</sup>は優しく微笑んだ。

「では君が代わりに村長にこう伝えるんだ かの星は天の頂に座  
さず、地に落ちた、と」

そこで一旦言葉を区切り、「けれど」と流星<sup>メテオ</sup>は表情を引き締める。

「それを口にしてしまったら、君はもうこの村にはいられないだろ  
う」

#### 【4】（後書き）

ついに流星<sup>メテオ</sup>の登場です。

当初の予定より少しずつ話の流れに修正が加わりつつあります。

一応一章は、ここで折り返し地点といえるのではないかと……。

このお話は四章構成なので、道のりは長いんだか短いんだかわかりませんが、少しずつ進めていけたらなと思います。

ご意見、ご感想頂けるとうれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7898s/>

---

星詠みと流星

2012年1月6日23時47分発行